

「入退院時における患者の薬物療法に関する情報共有・連携に関する調査」 実施結果について

長野県健康福祉部薬事管理課

1 目的

安心・安全で質が高く効果的・効率的な医療・介護サービスを提供する上で、患者が有効で安全な薬物療法を切れ目なく継続的に受けられるようにすることが求められていることから、地域包括ケアシステムの下で薬物療法に関わる薬局薬剤師（かかりつけ薬剤師）と病院薬剤師が、患者の服薬状況等の情報を共有しながら最適な薬学的管理やそれに基づく指導を実施することが必要である。

そこで、薬局薬剤師と病院薬剤師の連携（薬薬連携）に関する現状等を把握し、課題を明確化するための調査を実施する。

2 実施方法

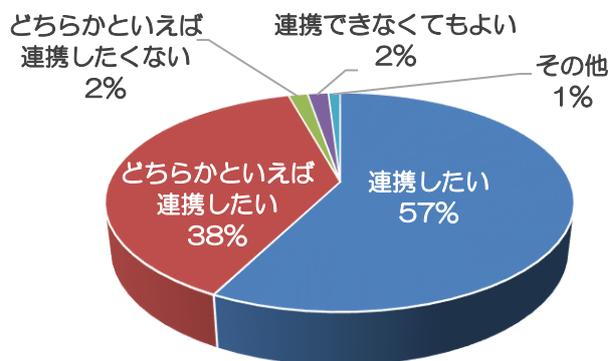
- (1) 対象施設：県内全保険薬局（978件）、県内全病院薬剤部門（127件）
- (2) 調査項目：薬薬連携の現状把握（情報共有項目・方法・頻度等）
- (3) 調査方法：『ながの電子申請サービス』を利用したインターネット調査

3 実施結果（抜粋）

回答薬局数：822件（回収率：84.0%）

回答病院数：79件（回収率：62.2%）

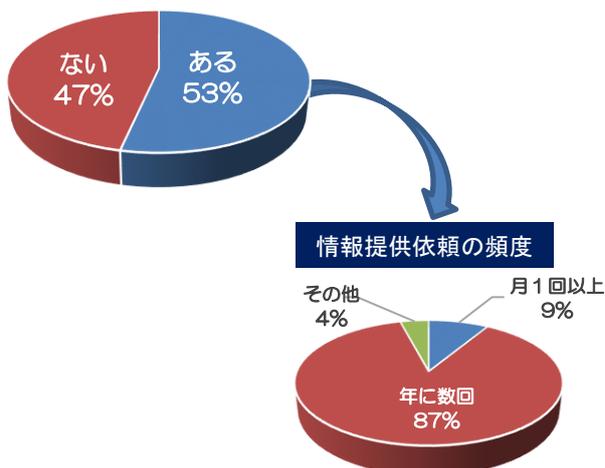
【薬局 Q.】 患者の一元的・継続的な薬物管理に関する地域医療機関との円滑な連携



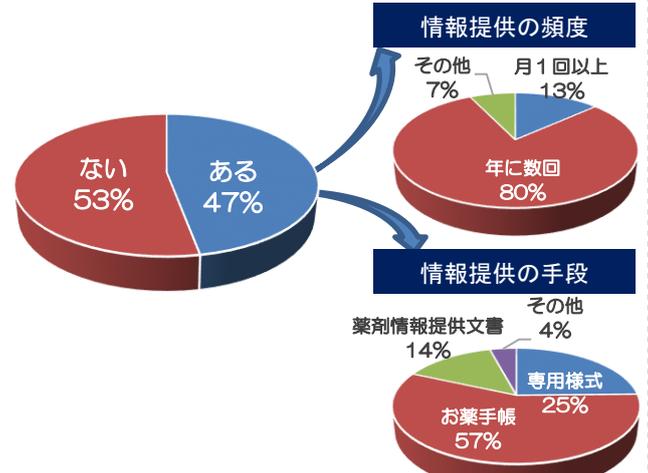
<コメント>（抜粋）

- ・協力したいが、1人薬剤師なので難しい
- ・時間的、人的、金銭的負担が重い
- ・形式的な連携ではなく、薬剤師同士の顔がわかる地域連携が必要
- ・報告や情報提供を行うにあたり、統一した書式があると記入しやすい
- ・統一された様式があると、時間短縮にもつながる
- ・新型コロナウイルス感染症防止などのため、リモートカンファレンスが行えればよい
- ・必要性があれば連携したい

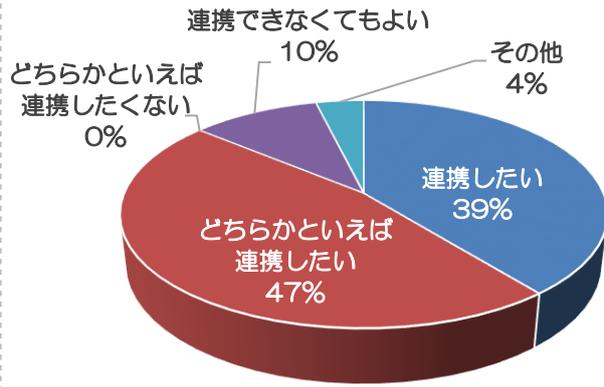
【薬局 Q.】 医療機関からの入院時情報提供依頼の受信



【薬局 Q.】 医療機関からの退院時情報提供の受信



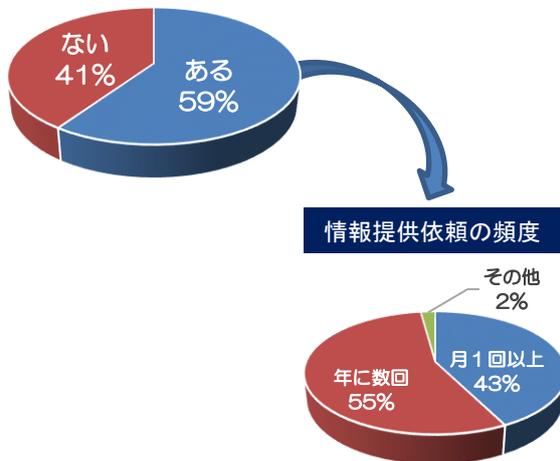
【病院 Q.】 患者の一元的・継続的な薬物管理に関する地域薬局との円滑な連携



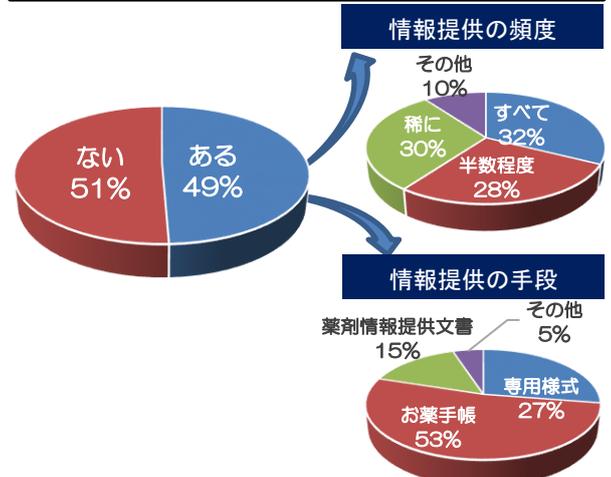
<コメント> (抜粋)

- ・人間的に困難
- ・他医療機関との連携も希望
- ・オンラインでの情報提供、情報共有システムの構築が必要
- ・少人数の薬剤師が調剤の合間に薬剤情報提供文書を作成するのはかなり厳しい
- ・地域で統一した連携シートがあれば煩雑にならずに情報共有しやすい
- ・マンパワー不足の解消が必要
- ・日頃から顔の見える関係を作り、薬物治療に対して同じ評価ができるよう、研鑽を積むことが必要
- ・病院内での退院情報の共有連携も必要

【病院 Q.】 薬局に対する入院時情報提供依頼の送信



【病院 Q.】 薬局に対する退院時情報提供の送信



4 総評

- 入退院時における病院と薬局とのコミュニケーションは進んできてはいるが、未だ発展途上であることが明らかになった。
- 薬薬連携の必要性は病院、薬局ともに感じてはいるが、人手不足や日常業務に追われ、なかなか取り組むことができないケースも見られる。もっとICTを活用できれば、より推進できる可能性もある。
- 薬局薬剤師と病院薬剤師との『顔の見える関係』を築くことがまずは必要との認識が多く、顔を合わせる機会を増やすことが薬薬連携の推進に繋がると思われる。
- 情報提供の共通フォーマットがあればさらに連携できている意見は多く、より一層患者に寄り添った医療を提供する上でも、効率的に薬薬連携ができる「情報共有シート」の共通フォーマットの作成が切望される。
- 積極的に連携していきたいという意見が圧倒的に多かったが、連携の必要性を感じていないとの意見も少数あったため、薬剤師が地域包括ケアシステムの下で果たすべき役割についての情報発信や、研修などを通じた薬剤師の資質向上も必要である。

今後の課題

- ★ 必要な人材の確保、ICTの活用
- ★ 薬局薬剤師と病院薬剤師の『顔の見える関係』の構築
- ★ 『情報共有シート』の共通フォーマットの作成・運用
- ★ 薬局薬剤師・病院薬剤師の資質向上